令和６年度　第１回岡山市子ども・子育て会議　全体会議事録（議事録／要約）

日時：令和6年5月24日（金）午後2時00分～午後3時5分

場所：岡山市勤労者福祉センター5階体育集会室

【開会】

〇岡山っ子育成局長挨拶

〇会長挨拶

〇新任委員紹介

〇会議成立確認・・・委員20名中14名出席により会議成立

〇議事（議事進行は会長）

議題　（１）中高生世代の意識に関するアンケート調査の結果、若者の意識に関するアンケート調査の結果、子ども・子育て支援に関するアンケート調査の結果について

【事務局から資料に沿って説明】

〇会長　　まず１つ目の中高生世代の意識に関するアンケート調査、この調査のことで、何か意見はあるか。

〇委員　　このアンケートは2,000人を対象として44.2％の回収率であるが、統計学的にこの調査結果はどれぐらい信頼性があると見ていいのか。

〇事務局　このアンケート調査は民間の事業者に委託をして実施しており、2,000人でこの回収率で、統計学上有意であるという結果である。

〇委員　　自分の意見を言う機会についてのところは、進路以外のことについて調査はしているのか。

〇事務局　進路などのほかに、まず１つ、家庭での大事な物事やルールを決めるとき自分の意見を言うことができますかという質問、学校での大事な物事、ルールを決めるとき自分の意見を言うことができますかという質問、質問としてはこの３つ、それにプラスして、若い世代の政策に関するようなことで意見を言う機会があったら参加したいかという、意見表明権に関わるところの４つの質問をしている。

〇委員　　将来への希望、中高生世代への質問で、中高生世代の方々が17.3％という割合で、

中高生世代で希望がないというこの数字を見て、事務局の方々はどのように感じているか。

○事務局　明るい希望があると回答した人は75.8％、逆に４人に１人ぐらいは明るい希望が持てないような状況という結果である。教育委員会にもこの結果を共有して、どういった取組が必要なのかというのを計画策定にも併せて考え、検討していきたいと思っている。

○委員　　学校が居場所になっているかという質問で、なっていないという回答がある。行政と学校とが子供たちに対してどのような手だてが必要なのかということになってこようかと思うが、この結果を見て何か、こうしたほうがいいというのがあるか。

○事務局　先ほどと同じになるが、まずは中高生世代ということなので、教育委員会としっかり共有をする。また、家庭に比べると学校のほうがかなり割合も下がっているので、何が課題になってるのか、そのあたりの整理も教育委員会と共有をして考えていきたい。参考までに、全く同じ調査ではなくて、対象年齢も異なるが、例えば居場所について、国が10歳から14歳を対象にした調査によると、居場所になっている、どちらかといえばなっているが、学校については73.4％となっている。年代がこの調査とは異なるので、参考までに。

○委員　　自己肯定感について、中高生と成人している方々の自己肯定感が割と一緒であるのは面白いことである。今から10年、20年ぐらい前は、国の調査で、自己肯定感は若者も年配の方も皆すごく低かったと記憶している。７割ぐらいの方が自分を好きと言えるような時代になっており、自己肯定感が大事だということを教育で言い出して、その効果が出ている。肯定する力が増えているのはいいことである。中高生の将来への希望がないということについて昔と違う点は、将来についてを早く決めさせられるということである。あなたたちは何にでもなれるんですよという過去のやり方から、今は、こういう道を選べばこのぐらいになる、こういう道を選ぶとこうなるということをかなり明確に示している。道が限定されている。フランスなどがかなり早い段階で進路を決めるというやり方をしていて、結果、若者の失業率は世界のトップクラスになっている。つまり、早い段階で職業を決めていく、進路を決めていくということがあまり功を奏していないということが世界的に見ても言える。一方で、よく将来が分からないほうが明るいというか、何にでもなれるような気すらする。今の若者たちが何に苦しんでいるのかというと、早く決めろとせかされて、自分の能力を低く感じ

る、親を見て比較をして、こんなもんかというふうにあきらめている、だから将来が明るくないのかと思う。今度、基本政策をつくっていく中で、未来をどんどん決めていくということがマルなのかバツなのかという議論がなされてもいいと思う。

○委員　　自己肯定感とは、自分のことが好きかどうかというだけが自己肯定感ではないと思う。今の自分は好きではないが自信があるとか、頑張ってやれるというか、自分を好きというだけの尺度で考えるアンケートというのはどうなのか。自分が好きか嫌いかと問われて、そんなに悪くないと思っている子たちは多分現状にもほぼ幸せな生活を送っていて、明るい希望も持てていると思う。今の自分が大丈夫なのかととても悩む思春期の時代に、これでは駄目だと自分のことを思うのが思春期である。好きではないけど頑張ってやれるというのが自己肯定感だと思う。簡単なアンケートでの聞き方に違和感を感じている。

○事務局　こども大綱の数値目標の中に、今の自分のことが好きかというところが80％というのが数値目標になっており、比較をするために、全く同じ聞き方をしている。今回は岡山市としてはかなり質問数を絞っている。初めての調査だったのでこういう形で実施したが、こども家庭庁がやってるようなさらに踏み込んだ調査では、今の自分が好きであるという以外にも、自分には自分らしさというものがあるとか、そういったかなり細かい項目で分析をされているので、また次回このアンケートをするときには検討させていただきたい。

○会長　　自己肯定感という言葉をよく使うが、言葉の使い方は本当に難しい。自己有用感という言葉もあり、こちらは自分は周りの人にも役立っている、周りの人との関係から自分自身を見詰め直すという意味が入ってくる。言葉遣いは難しいが、アンケートをしっかりしたということは、意味があることだ。それでは、２つ目のアンケート調査が若者の意識に関する調査にうつる。この回収率が34.7％であり、だいぶ低いと思う。この若者の意識に関する調査について意見はあるか。年齢別を見ればわかるが、18歳から39歳なので、幅はすごく広い。そのあたりどうだろうか。また、結婚や子ども・子育てや仕事などに絡んでいろいろと質問がされている。

○委員　　このアンケートは若者支援に関する施策の参考とするために実施したということであれば、どういう施策を想定されて聞かれたのか。年齢層が広過ぎる、大学生の年齢の方と、もう大人の方とに対して、どんな施策をしようと思ってのアンケートだったのか聞かせてほしい。

○会長　　このアンケートを具体的にどのような施策に反映させようとしているのかという質問である。

○事務局　まず今回しっかり聞いてみたいと思ったのが結婚あるいは子供を持つことについてである。少子化対策の一つとして結婚支援を岡山市としてもやっている。結婚を希望している人がなぜ結婚していないのか、そのあたりの原因や求めている支援などを聞いて、今後の施策の参考にする。困難経験、つらかったこと、悩みがあったときの相談先なども、若い世代はＳＮＳとかメールよりも対面が選ばれていることも分かった。いろんな相談機関が岡山市にもあり、関係局とも共有して、困ったことや悩みがある方がちゃんと相談先につながっていくように、広報も含めてやっていきたい。

○委員　　つらい経験をしたとき誰かに相談したかという問いで、相談していないというのが36.7％となっている。相談しなかった理由として、相談してもどうにもならないと思ったとある。相談してもどうにもならなかった結果がどうなったのか分からないが、相談できるような体制づくりが必要である。相談するところがない、相談する相手がいない、誰に相談していいか分からないということが、自殺につながってしまうのはいけないので、体制の整備をしてほしい。

○会長　　相談体制づくりをお願いしたいという意見である。それでは、３つ目の子ども・子育て支援に関するアンケート調査にうつる。ゼロ歳から小学６年生までの子供がいる家庭を対象としている。委員の中にもゼロ歳から小学６年生までの子供さんがいるご家庭もあろうかと思うが、ぜひご意見・ご質問・感想などをお願いしたい。

○委員　認定こども園の増加が13.1ポイント増というのは民営化の影響でこども園が増えているからこども園の利用が増えていると受け取ってよいのか。

○事務局　平成26年はこども園がゼロ園だったのが、この４月には70園にまで増えている。園の数も増え、認知度も広がり、入りたいと思う方も増えてるのではないかと考えている。

○委員　　愛育委員としてのこんにちは赤ちゃん事業で赤ちゃんをずっと訪問しているが、16年目になる。始まったときともう随分状況が変わっているが、それ以外に保健センターというか愛育委員が関わる事業として、赤ちゃん健やか相談と呼ばれていたものがあり、それが今、さんさん相談になった。それはコロナのときに保健師さんたちの忙しさの緩和のためなのか、それまで年間10回あったものが、年間４回になった。行ったらいつでも行けるという場所ではなく、ネットで予約しないと行けない場所にな

ってしまった。これまでは、地区で十何人かの年間利用者が今年は２人とか３人となった。これまで赤ちゃん健やか相談を利用していた人たちは、赤ちゃんを産んでから１年目ぐらいのとても悩みの多い時期に予約なしで行ける場所が岡山市の行政サービスとして減ってしまったということが現実にある。赤ちゃんを産んだばかりのお母さんたちは結構居場所を必要としている方がおられる。何らかの施策や、もうちょっとよい居場所ができるのか。困難なことがあったときに人と相談しているということが多いということで、ネットとかではなく、人ときちんと対面で悩み事を相談する機会があるというのは大変大きいと思う。その一番最初が赤ちゃん健やか相談の場であり、それは地域の中で相談できる場所があるということだと思うが、その場所がどんどん減っており、各小学校区単位であった健やか相談が、中学校区単位になり、それが今はもうネット予約という状況になって、とてもサービスとして減っていると思う。そこをぜひ回復してほしい。全てのこれからなされる子供施策については、子供に対する居場所づくりに関しては、中学校区単位ではなく小学校区単位で考えてほしい。中学校区は本当に広く、子供が歩いて行ける範囲で居場所があるということが多分とても大切である。そのあたりのサービスはとても低下してきているというふうに私は感じている。

○事務局　愛育委員さんには日頃から地域での子育て支援に本当にご協力いただいている。育児相談についても、愛育委員さん方と一緒に各小学校区ごとで取り組んできた事業である。コロナのときに予約制にしたということで、人数が限られてきたということもあるし、会場数も大分減ってきている。その代わりに、オンラインでの相談や、各保健センターにおけるさんさんステーションでの相談を充実させるというところでやってきている。ただ、地域の事情とかご要望に応じて、その回数とかは保健センターと相談しながら決めて実施をしているところである。本当にお母さん方がベビーカーを押して行ける範囲でのそういった支援がとても重要だと考えている。地域の中での親子クラブであるとか地域のほかの団体等との交流とかを進めながら地域の中で居場所をつくっていけたらよいと思う。またいろんなご意見をいただき、相談させていただきながら実施していきたい。

○事務局　関連して、１つご紹介させていただく。ちょうど今週からこども誰でも通園制度の試行事業ということで、申込みが始まったばかりである。現在は試行中だが、再来年度からは全国的にも本格実施を目指してやっている。利用のアンケートの中に、相談

できる人、保育園で保育士さん、専門家に相談できるという声も聞いているので、試行事業の結果や、先ほどのご指摘等も踏まえて、保健所などとも連携し、園の先生方とも協力しながらやっていきたい。

○事務局　保育園認定になってなくても、いわゆるそれ以外の誰でもなので、理由も問わずできますよというのが全国的に今試行状態である。本格実施までにどうなるか、詳細は決まっていないが、岡山市でも来月から順次やっていきたい。

議題　（２）子どもの実態調査

【事務局から資料に沿って説明】

○会長　　子供の生活実態調査は対象が小学校の５年生、それから中学校の２年生、そしてその保護者という調査になっている。言葉の使い方について、中学校は児童ではなくて生徒なので、中学２年生の生徒となる。子供の貧困、ヤングケアラーといった言葉も出てくる。これが連鎖をしていくことを防がないといけない。そのためのいろんな手だてを考えていくための基礎資料になる。

○委員　　調査対象を小学校５年生と中学校２年生にした意図を教えてほしい。

○事務局　質問に対する理解を考慮すると、特に小学生の場合、高学年が望ましいというふうに考え、小６や中３の受験年度を避けて、この年齢に設定をしている。

○会長　　ほかに何かないか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○会長　　後で見直したりしている中で何か疑問などあれば、ぜひ市のほうへ言ってほしい。非常に参考になると思う。施策を打つ上ではアンケートの分析をどのように生かしていくかが大切である。分析が非常に難しいので、いろんな人の意見を聞かないと分析にはならない。会議を使って、委員さんの協力をお願いしたい。議題は以上である。そのほか、何か事務局のほうからあるか。

○事務局　今後のスケジュールについて、こども計画骨子案を大体８月ぐらいまでにまとめ、この会議で審議をお願いする。こども計画素案については11月ぐらいになる。骨子案でご意見をもらい、必要な修正等をして、素案の形で11月に見ていただく予定である。その後、直接子供たち、若い世代の意見を聞いたりパブリックコメントなども実施をして、最終的には今年度末には計画として完成をさせたいと思っている。

○会長　　こども計画については８月ぐらいに骨子案、それから11月ぐらいに素案ということである。この会議で諮るということである。今年度は会議の開催は今日を含めて３回を予定している。それでは、本日予定をしていた案件は終了した。

閉会